

(算数科)

一人一人が興味関心をもって、粘り強く取り組む力を育てる

—互いに学びあい、進んで取り組む子ども—

大阪市立真田山小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校の児童の実態として、係や当番などの決められたことや、指示されたことは素直に行動できるが、「やりたいこと」を見つけて、自ら行動することが苦手な児童が多い。また、学習においても一人学びで終わってしまう児童が多く、協働的な学びが少ないと感じる。指導者においては、若手教員が増えてきており、指導力に不安を感じる教員が多数いることがわかった。学校教育目標である「心豊かで すすんで課題に取り組む たくましい子」を目指して、研究の視点を絞り、児童と教員が一体となれるように研究を進めていくことが大切である。

2. 研究の趣旨

指導者は、児童の実態から、指導者の発問や指導の工夫を通して、児童が主体的で協働的に取り組めるようになる授業の構築をはかる必要があると考えた。また、これらの課題を解決するために、指導者の働きかけで児童同士がつながる機会をつくったり、発問や発言から、児童と指導者がつながる姿を目指したいと考える。そのために、算数科を通して、以下の3つの柱を立て、研究を進めてきた。『A 導入の工夫』『B 話合いの場の設定』『C ファシリテーターとしての指導者の役割』の3つの視点に沿って研究し、目指す子供像へと近づけていきたいと考える。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点 A 導入の工夫

導入を工夫することで、児童が課題に興味・関心をもち、「解決したい」と思えるような指導の手立てを考えた。2年「三角や四角の形を調べよう」では、指導者が大きく演技をしたり、四角や三角で作られたパズルを落とすハプニングを装ったりすることで、児童の興味を惹きつけた。また、課題を提示する際に、ICT を使用し、動画でわかりやすく提示したり、問題文の一部を隠して続きを想像させたりし、課題に関心をもてるような手立てを工夫した。

視点 B 話合いの場の設定

話合いの場の設定として、話型を発達段階に応じて統一すること、話し合う人数や話し合う際の机の形や様子、ICT の活用の仕方について検証をした。学年に応じた話型の統一では、司会の表を作って話合いを促したり、意見の違いを比べられるような話し方を統一したりする工夫を行った。また、話合いの人数は3～4人と少人数に限定した。話し合いがしやすい場の設定については、「横並びの形」と「向かい合う形」のどちらも検証し、それぞれのメリット・デメリットが見えてきた。

視点 C ファシリテーターとしての指導者の役割

まず、「ファシリテーション」の認識について、校内で共有する必要があった。そのために、文献や著書の内容を伝達研修したり、指導主事の方に来ていただいて講習会を開いたりした。さらに、真田山小学校独自のファシリテーションを定め、職員全体で捉え違いのないように注意し、研究を進めてきた。

本校が定めるファシリテーションを「1 場を作り・つなげる」「2 受け止め・引き出す」「3 かみ合わせ・整理する」「4 まとめて・分かち合う」の4つの視点とした。それぞれの視点に沿って、指導者は発問の仕方を整理し、児童への問い返しやつぶやきを拾うことで、児童が気付いて学べる機会を増やせるように努めた。そのためには、児童の考えを把握することと、教材をよく知ることが必要となることも明らかとなっていった。

検証授業を重ねていくうちに、ファシリテーションが必要となる場面（「気づく」や「まとめる」など）に焦点化し、その場面にあった発問の仕方や児童の意見の拾い方を精査することができた。また、児童の意見を把握するために、名列表に児童の意見を書き込み、指名計画を立てることで授業がコーディネートしやすく、深い学びへとつながる場面も見受けられた。

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

『A 導入の工夫』では、児童の興味関心を高めるために、指導者は ICT を活用したり、課題提示の際に大きく演技をしたりすることで、児童が「解いてみたい」と思わせることが大切であるとわかった。また、問題場面を想像しやすくするために、具体物や身の回りの物を用いることも有効であることがわかった。

『B 話合いの場の設定』で大切にしなければいけないことは、「自分の考えをもつこと」「話し合う人数や形を意識すること」「話す順番や話型を設定すること」「話し合う目的を共有すること」であることがわかった。特に、「話し合う目的を共有すること」は、児童の深い学びを追求するうえで、特に重要であると感じた。

『C ファシリテーターとしての指導者の役割』では、まず、児童の実態や思考を把握することと、教材をよく知ることが必要である。そのうえで、指導する順番（単元、1 時間の流れ、発問、指名順）を工夫することで、主体的で深い学びへとつながることがわかった。指導者と児童、または児童同士がつながり合うことで、学習への関心が高まったり、気づきが生まれたりすることも確認できた。そのため、指導者は、指導者と児童のやりとりだけで終わらず、ファシリテーターとしての力を高めていくことが求められる。

（2）今後の課題

研究を進めるうえで見られた課題として、授業の中の重要な学習事項を児童の口から引き出せず、指導者が先に言ってしまうという点があげられる。指導者が先に言ってしまうことで、思考が深まらず、話合いが意見を伝えるだけで終わってしまったり、ふりかえりの際にもうまくまとまらなかったりする場面も見受けられた。このような課題を解決するためには、発問の精査が必要である。そのためには指導者は、「論理的に児童に説明すること」と「児童に気づかせたいこと」を事前に分けておき、授業での出し方を工夫することが求められる。